

放射線環境学 レポート課題

私はまず、「あなた自身ができそうな被災地の農業再生について考えを述べよ」という課題に対し、まず「あなた自身」とはどういう意味なのか考えた。いち学生であり農学も放射線環境学もまだ知識の浅い私がいまできる具体的な行動なのか、それとも将来的に専門家として（あるいは専門家にならなくとも普段の生活の傍らで）できることなのか…とりあえず、両方について考えてみようと思う。まずは後者について。溝口教授は授業や資料のなかで『自分は一生農業に携わることもなければ、被災地の村を訪れることもないだろう』という考えの学生が多く、これを正していく必要がある」とおっしゃっていたが、残念ながら現時点では私もその一人だと思う。私は原発問題、それに伴う被災地の農業問題には大学入学前から興味がありこの授業を受講したが、私は官庁への就職者も多い農業・資源経済学科に進学予定で、植物生理などミクロな視点で農業について学ぶ講義よりも農業経済学や農業史など国家レベルで農業について人々がどう関わってきたかを学ぶ講義を多く受けており、自身を客観的に見ても、考え方がどちらかと言うと技術者・研究者よりはむしろ役人寄りなのではないかと感じている。実際に放射線環境学の他の教授の授業の出席票を書く際も、授業内容を受けて、政府やマスメディア、大手企業がどうすべきなのかを考えてきたつもりである。溝口教授は「東電役員しかり、国の政策に携わる役人しかり、自分事としての実感がなければ、判断を誤ってしまうのは当然」ともおっしゃったが、現地の実情を知らない適切な判断を下せないのは勿論ではある。しかし現地の実情と専門知識とを十分に理解している農学研究者の偉大さを理解し、その声に耳を傾ける意識が働けば、その誤りは十分和らげ得ると思う。「私たちには活動の成果を行政的な除染計画へ反映させる権利や権限が全くありません。」と教授もおっしゃる現状を覆すためにも、ありきたりな答えではあるが、今はとにかく大学で様々な講義を受けその内容を理解することが、もしかしたら将来的に力になるかもしれない。とても回りくどい方法だが、それが一番の近道であると考えている。

次に前者について。いま具体的に私が行える被災地の農業再生は、大学の講義で学んだ内容などを根拠に、家族や親戚など、近いところから被災地の農作物に対する不安感を拭うことであると考えている。今までの「放射線環境学」や「食の安全科学」などの講義では農学の中でも様々な視点から研究を行っている教授たちがそれぞれの立場から被災地の農作物がいまどれぐらい安全なのか、これからどうなっていくのかについて評価をしていたが、その内容はおおむねポジティブなものであった。少なくとも今市場に出回っている福島県産の作物は完全に安全基準を満たしており、また震災後改正された安全基準そのものも適切なものであると、講義をある程度受け終えた今考えている。実際に農作物が安全であるならば、あとは消費者がそのことを十分に説明され、理解する必要がある。被災地の農業再生は、どれだけ現地で努力が行われ、国が支援を行ったところで、実際に店先で作物が

売ることがなければ成し遂げられないからである。「放射線環境学」第6回講義で放射能汚染をめぐる消費者意識について学んだが、2014年になっても消費者の被災地産の農作物への不安は2011年からほとんど改善していない、それどころか悪化している面すら見られるという状況だった。この理由については講義では触れられていなかったため私見ではあるが、原発事故後当時、テレビなどのマスコミがセシウムがどうだの、放射線が何マイクロシーベルトだのと、一般人が分からないような専門用語を駆使してとにかく国民の恐怖を煽り、それが後に改善したことについてはほとんど報道しなかったことに原因の多くがあると思う。また、同講義では「植物工場で作られた野菜」という現状あまり消費者にいいイメージを持たれていない農作物について、そのメリットとデメリットとをできるだけ偏りなく消費者に伝えたところ、評価と購買意欲が有意に上がったということも学んだ。同じことが被災地の農作物についても言えると思う。現に私の両親や祖父母は四年前のマスコミにすっかり影響されて福島県産の野菜を避けていたが、「東大の教授に教わった」という前置きのもとで（この「虎の威を借る」ことが肝要だと思う）論したところ、納得してくれたようだった。もしかしたら主婦のネットワークなどを通じて考えを広めてくれるかもしれない。このように、折角農学部で学んだのだから、それを近い人々に広めていくのが、公的な発言力を持たない私個人ができる最善の農業最善であると考え。あとは、選挙で農業問題について自分と近い考えを持つ候補者に投票することだろうか。私自身でできることといえば、これぐらいしか今は考えつかない。とにかくは力を持つ国が動くこと、国を動かすために個人個人が働きかけること、これが大切であると思う。